

令和 6 年 6 月 5 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00792

研究課題名（和文）ベンガル語話者の認知と言語化：移動表現の考察に基づく中間言語研究

研究課題名（英文）Cognition and verbalisation of Bengali speakers: an intermediate language study based on a consideration of motion event description

研究代表者

江口 清子 (Eguchi, Kiyoko)

大阪大学・大学院人文学研究科（外国学専攻、日本学専攻）・講師

研究者番号：90812537

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、ベンガル語話者がどのように世界を認知し言語化するのかを調査したものです。

特に、走る、飛ぶ、といった移動の事象について研究しました。例えば日本語では「走って部屋に入る」と表現することを英語では“run into the room”のように言います。日本語では「行く」「来る」も一緒に使うことが多く、この観点から、ベンガル語は日本語のタイプだと思われがちですが、映像を用いた実験の結果から、英語のタイプだということがわかりました。しかし、英語のように移動の様態を動詞で表す特徴もあまり見られなかったことから、従来の言語分類の仕方に一石を投じる事実を明らかにしました。

研究成果の学術的意義や社会的意義

第一に、移動表現における、日本語との類似点、相違点が明らかになったことで、日本語教育への応用が考えられます。現状では日本語の教科書の多くは、英語との対照に基づく研究の成果を出発点に書かれたものですが、本研究を応用することで、ベンガル語話者を対象とした教材を作成するなど、学習者が、より容易に日本語を習得することができる環境づくりの支柱となります。外国語教育全体へと視野を広げた場合には、学習対象の言語だけでなく、学習者の母語の研究の重要性もアピールすることができる。

研究成果の概要（英文）：This study investigated how Bengali speakers perceive and verbalize the world.

In particular, we studied motion events such as running and flying. For example, what is expressed in English “run into the room” is said in Japanese as “enter the room by running”. In Japanese, ‘go’ and ‘come’ are also often used together, and from this perspective, Bengali is often thought to be of the Japanese type, but the results of the video-based experiment showed that it is of the English type. However, the fact that the feature of expressing the manner of motion in verbs, as in English, was also not so common, revealed a fact that throws a wrench into the conventional way of classifying languages.

研究分野：言語学（語彙意味論、類型論）/ 第二言語習得

キーワード：ベンガル語 認知 移動表現 類型論

1. 研究開始当初の背景

応募者は研究開始当初、国際協力機構 (JICA) および、宮崎大学を含む宮崎の産学官が一体となり運営される「高度 ICT 外国人材受け入れプロジェクト」の根幹をなす「バングラデシュ国 ICT 技術者向け日本語教育プログラム」に参画し、バングラデシュ国内で、教材の開発および日本語教育の実施に携わっていた。教材作成当初は英語で文法解説を記述していたが、学習者間で英語レベルに差があることなどから、学習者の母語であるベンガル語での解説が必要と判断し、教材内での解説をすべてベンガル語に翻訳した。しかし、それは単純に英語での解説の翻訳であったため、時には学習者の理解を妨げることとなっており、対照研究の必要性を強く感じた。その後、個々の文法事項について、翻訳者に説明し、ベンガル語話者の理解につながるような記述に変更しているが、全体を見渡した際、統一的な説明になっているとは言い難い。ベンガル語は膠着語的な特徴を持ち、主要部後置型言語であるなど、日本語との共通点も多いことから、構文レベルでの対照研究が行われれば、その成果に基づき、より効率的な文法指導が可能になると考えられる。応募者はすでに、同様の手法で日本語とハンガリー語の対照研究とそれぞれの学習者言語の中間言語研究、あるいは複数の母語話者言語と日本語および英語の学習者言語の中間言語研究に携わった経験があり、本研究も同様に進めることを計画した。

2. 研究の目的

本研究は、ベンガル語話者の言語表現を主な対象とし、第二言語習得における学習者の中間言語的特徴とその変容を明らかにすることを目的とした。考察対象として、もっとも基本的な言語表現の一つである移動表現を取り上げ、対象者の母語(ベンガル語)と学習言語(日本語および英語)において、認知言語学的枠組みを用いて次のように考察する。1) 映像を用いた言語実験を行い、ベンガル語話者の事態認知と言語化の関連性を明らかにする。その際に、母語の言語表現だけでなく、ベンガル語母語話者による学習言語としての日本語および英語の言語表現も収集する。2) それぞれの母語話者の言語表現や他の言語を母語にもつ日本語学習者や英語学習者の言語表現とも比較分析し、言語転移(母語の影響)や学習上の困難などを含む中間言語的特徴について解明し、学習者の特性に合った教材作成等、日本語教育を始めとする外国語教育への還元を目指す。

3. 研究の方法

(1) 映像を用い、統一的な手法で、数量的な比較を行う。

【計画】先行するプロジェクトで作成された実験ツールを用いて、ベンガル語の移動表現を体系的に調査、記述する。同一の映像をもとに産出された言語表現について、一定の基準でコーディングを行うことで、異なる言語も統一的に分析する。また映像を用いることで、学習者言語のデータから、事態認知と言語化の関わりについても検証する。

【実際の遂行状況】研究開始1年経たないうちにコロナ禍となり、応募者らを含むプロジェクト関係者は帰国を余儀なくされ、プロジェクト自体、2020年10月に終了した。そのため、当初予定していた環境での研究を遂行することはできなくなった。インフォーマント(ベンガル語母語話者)が身近に多数いる状況での研究を計画していたため、実験手法の変更を余儀なくされた。その後、2022年にオンラインでの調査を実施し、さらにコロナ禍が収束した2023年には追加で現地での調査も実施した。

(2) 複数の第二言語での検証を行う。

【計画】母語の言語表現に加え、複数の第二言語(日本語及び英語)の表現を比較検討することで、言語転移(母語の影響)について体系的に明らかにすることが可能となる。また、他の言語を母語にもつ日本語学習者や英語学習者の言語表現とも比較分析することで、各目標言語の中間言語的特徴の解明につながる。さらに、学習者の言語表現、すなわち、ベンガル語母語話者が異なる言語を用いた場合の表現の分析を通して、ベンガル語母語話者の事態認知の特性を明らかにし、言語使用レベルでの言語相対説を検証することができる。

【実際の遂行状況】(1)の実験が大幅に遅れたことに加え、適当な実験参加者を見つけることができず、計画に終わった。

4. 研究成果

国立国語研究所のMEDALプロジェクト(NINJAL Project on Motion Event Descriptions across Languages)で作成されたさまざまな移動事象のビデオ映像を用いて、オンラインで発話実験を行った。ここでは自立移動事象の27クリップ分(3種類の経路: TO, TO.IN, UP, 3種類の様態: WALK, RUN, SKIP, 3種類のダイクシス: 話者方向、話者から離れる方向、そのどちらでもない方向への移動の組み合わせ)の結果を報告する。実験参加者はバングラデシュ出身のベンガル語母語話者15名(男性11名、女性4名、平均年齢27.1歳)であった。

経路表示と経路の表出方法

図 1, 2 で示すように、経路が主要部および準主要部（複雑述語の前項）で表示された合計の割合は 24.2%（主要部 13.8%、準主要部 10.4%）で、経路が主要部外で表示された割合は 85.9%であった。これらの結果は、ベンガル語が経路主要部外表示型言語であることを示している。

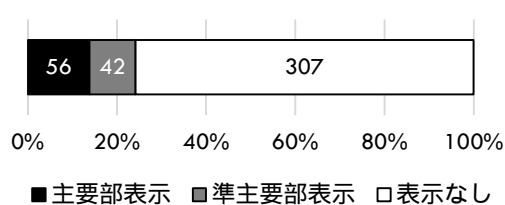


図 1. 主要部 / 準主要部における経路表示率

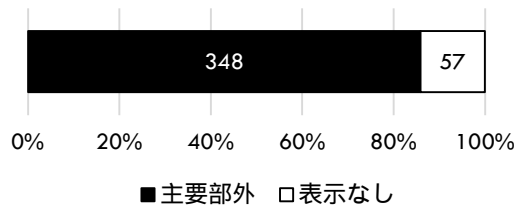


図 2. 主要部外要素における経路表示率

さらに経路表出についてより詳しく見てみると、図 3 で示すように、その表示率や表現位置は経路場面ごとに異なることがわかった。

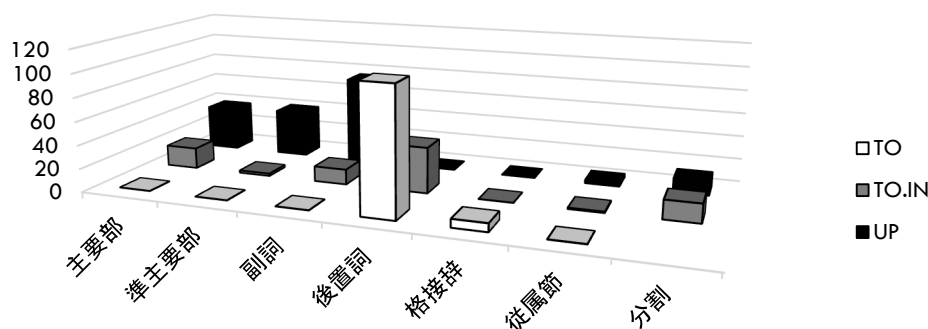


図 3. 場面別経路表現位置

TO は、経路表示が行われた 100% が主要部外での表示であり、1 例のみが 2 重表示（後置詞 + 格接辞）で、残りは単独表示（後置詞 106 例、格接辞 6 例）であった。TO.IN は、単独表示が 37 例（うち主要部 / 準主要部は 7 例）、2 重表示が 26 例（うち主要部 / 準主要部を含むものは 13 例）であった。

UP は、単独表示は 34 例（うち主要部 / 準主要部は 15 例）にとどまり、2 重表示が 64 例（うち主要部 / 準主要部を含むものは 61 例）のほか、3 重表示も 2 例観察された。なお、主要部外表示型言語でありながら UP を主要部で表示する傾向はロシア語と共通する (Łozińska & Pietrewicz 2018)。

ダイクシスの表出方法

ダイクシスとの関わりでは、図 4 で示すように、主要部でダイクシスが表出された割合が 77.8% と非常に高く、ダイクシスに関しては主要部表示型であるといえる。この特徴はネワール語と共通する (松瀬 2017)。

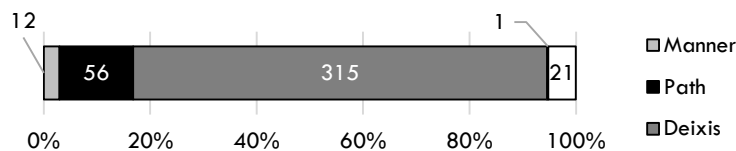


図 4. 主要部で表現される概念

ベンガル語ではダイクシスの表出方法には 3 通り（動詞、1 人称代名詞をともなった後置詞句、副詞）が存在するが、今回の調査ではこの 3 種類のダイクシス表現が同一節内に現れる回答は観察されなかった。2 重表示が観察されたのはおもに /TwdS/ 場面（103 例中 98 例）であり、その場合は、主要部と 1 人称代名詞をともなった後置詞句の組み合わせであった。単独表示はすべて主要部のみによる表示であった。

この言語でさらに興味深いのは、ダイクシスが表出された場合に、経路が主要部で表示された割合が 14.4%（すべて準主要部）であるのに対し、ダイクシスが表出されない場合には 1 例を除いてすべての回答において経路が主要部で表示されたという事実である。

様態の表出方法

様態は、もっとも多くの回答において従属節で表現された(215例:53.1%)が、表出されない回答も多く見られた(150例:37.0%)。様態が主要部で表示された回答は、主要部で表示されたものはわずか12例(3.0%)で、準主要部で表示されたものは17例(4.2%)であった。

追加で行った母語話者への聞き取り調査からも様態動詞を主要部とする文は容認度がかなり低いことがわかった。つまり、主要部外表示型言語であるということと、主要部で様態動詞を用いるということは独立して考えるべきである証拠が提示されたことになる。

まとめ

本発表では、実験調査によって得られたデータに基づき、ベンガル語は経路主要部外表示型(ダイクシスに関しては主要部表示型)言語であることを明らかにした。しかし、従来、経路主要部外表示型として知られる英語などの言語とは異なり、主要部では様態動詞は用いられないことも同時に確認した。これらの結果から、経路をどこで表すかというタルミー類型論の本質と、主要部で経路動詞あるいは様態動詞が用いられるかということは、それぞれ独立して論じられるべき事実であることを示した。今後、Narasimhan (2003) で考察されたヒンディー語に関しても、本研究と同様の調査により検証することが望まれる。

また、当初計画したように、複数の第二言語での検証を行うことで、ベンガル語母語話者が異なる言語を用いた場合の表現の分析を通して、ベンガル語母語話者の事態認知の特性を明らかにし、言語使用レベルでの言語相対説を検証することができる。今後の課題としたい。

参考文献

- Aske, Jon (1989) Path predicates in English and Spanish: A closer look. *BLS* 15: 1–14.
- Levin, Beth, and Malka Rappaport-Hovav (1995) *Unaccusativity: At the syntax-lexical semantics interface*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Łozińska, Joanna & Barbara Pietrewicz. (2018) Lexicalisation of vertical motion: A study of three satellite-framed languages. *Études cognitives [Cognitive Studies]* 18. 1–13.
- 松瀬育子 (2017) 「ネワール語の移動表現」松本曜 (編)『移動表現の類型論』65–94. 東京: くるしお出版.
- 松本曜 (1997) 「空間移動の言語表現とその拡張」中右実 (編)『日英語比較選書 6 空間と移動の表現』125–230. 東京: 研究社出版.
- Matsumoto, Yo (2003) Typologies of lexicalization patterns and event integration: Clarifications and reformulations. In Shuji Chiba et al. (eds.) *Empirical and theoretical investigations into language: A festschrift for Masaru Kajita*, 403–418. Tokyo: Kaitakusha. [Reprinted in Adele Goldberg (ed.), *Cognitive linguistics (Critical concepts in linguistics)*, Vol. III, 422–439. London: Routledge. 2011.]
- 松本曜 (2017) 「移動表現の性質とその類型性」松本曜 (編)『移動表現の類型論』337–353. 東京: くるしお出版.
- Narasimhan, Bhuvana (2003) Motion events and the lexicon: a case study of Hindi. *Lingua* 113 (2): 123–160.
- Talmy, Leonard (1985) Lexicalization patterns: Semantic structure in lexical forms. In: Timothy Shopen (ed.) *Language typology and syntactic description, Volume 3: Grammatical categories and the lexicon*, 57–149, Cambridge: Cambridge University Press.
- Talmy, Leonard (1991) Path to realization. In: *Proceedings of the Seventeenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society* 17, 480–519.
- Talmy, Leonard (2000) *Toward a cognitive semantics, Volume 1: Concept structuring systems*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Wienold, Götz (1995) Lexical and conceptual structures in expressions for movement and space: with reference to Japanese, Korean, Thai, and Indonesian as compared to English and German. In Urs Egli, Peter E. Pause, Christoph Schwarze, Armin von Stechow, and Götz Wienold (eds.) *Lexical knowledge in the organization of language*, 301–340. Amsterdam/ Philadelphia: John Benjamins.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 吉成祐子、江口清子	4. 巻 12
2. 論文標題 非意図的な事象による事態の描写の責任意識の関係 日本語・ハンガリー語の考察から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 神戸言語学論叢	6. 最初と最後の頁 144-157
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 江口清子	4. 巻 1
2. 論文標題 第二言語習得における着点への到達の有無と移動表現：日本語・ハンガリー語の双方向的比較	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ハンガリー研究	6. 最初と最後の頁 131-168
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 江口清子・石川さくら
2. 発表標題 様態動詞の経路句との共起制限と移動表現の類型論：ベンガル語の自立移動表現の考察から
3. 学会等名 日本言語学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 江口清子
2. 発表標題 B-JET 日本語教育プログラムにおける教材開発と日本語教育的課題
3. 学会等名 令和3年度 海外日本語教育学会 第1回例会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 吉成 祐子、眞野 美穂、江口 清子、松本 曜	4. 発行年 2021年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 282
3. 書名 移動表現の類型論と第二言語習得	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	石川 さくら (Ishikawa Sakura)	東京外国語大学・大学院生 (12603)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------